平成 17 年 9 月 17 日 に「よみがえれ！新町紡績所の会」が設立されました。新町の有志を中心とする方々の準備段階からのご尽力、県や町当局者のご協力のたまものであると感謝申し上げます。

うれしいことに、新町は日本で一番小さな町であるにもかかわらず、既に 460 名もの方々が本会に入会下さいました。それは、転勤などで全国から新町に来られたカネボウの社員が新町に永住したり、銀座通りで買物するといったことを通じて経済的に貢献するといった長い歴史の中で、新町の住民がカネボウに親しみと愛着を持つようになり、あたたかい目で見てこられたことの証しであると思います。

こうした住民の方々とともに、明治 10 年に新町の地に日本人自身の手によって作られた最初の近代的官営工場の世界遺産登録に向けた取り組みへの理解を広め、保存の機運を高めるように努力するとともに、関係各方面へ働きかけたいと思います。

世界遺産としての価値をもつ日本の近代化遺産を保存し、その活用を志すことは、その地域の住民が文化的に心豊かに暮らすという意味で住民自身のためであることは言うまでもありません。自分たちの誇りでもあることもいうまでもありません。同時に、広く日本に限らず、世界の人々のため、大きくいえば人類のためでもあります。もし何もせず手をこまねいている間に近代化遺産が失われるようなことになれば、それこそ地元の私たちの見識が疑われることにもなりかねません。

和釘や 4 角ボルトの使用、三角形を柱の構造の中に取り入れ質実剛健な作りを可能にしたトラス構造などを用いた建物自体の価値には興味深いものがあります。明治 10 年当時のドイツ製と思われるガラスがそのまま窓枠に収まり、雨に濡れる様には感動すら覚えます。

また欧米の常識を破って非白人の国・プロテスタントの倫理を持たない儒教国である日本が明治維新以降急速に近代化を果たし、日清・日露戦争、第一次世界大戦に勝利し、1920 年代には世界の五大国のひとつになったことは世界の驚異でした。そしてアジア・アフリカの人々に大きな希望を与えました。

なぜ日本人には近代化が可能だったのか。なぜ日本人には、白人に負けない国を作れたのか。今でもアジア・アフリカの人々は、そうした疑問を持ち、そして日本を模範として日本に見習おうとします。日本を目標とします。その答えは、富岡製糸場に、新町紡績所、そして県内の製糸関係遺産にあるのです。それだけをとっても世界遺産の価値があります。

これからみんなで手を携えて新町紡績所の保存運動を広げましょう。目的は、新町紡績所を富岡製糸などとともに世界遺産登録することです。ですから、新町の住民に限らず、富岡や桐生の皆さんとはもちろん、賛同して下さる方とは広く、市町村、県、国を越えて協力しましょう。

新町は、来年一月には高崎市と合併しますが、高崎市は「ここに泉あり」で広く知られるように経済的には今では考えられないような厳しい時代から群馬交響楽団を育み、高崎経済大学という全国的にも知られた立派な市立大学や美術館などを持つ文化都市です。ですから、高崎市も市民の皆さんも世界遺産に向けた運動に賛同下さることと思います。

近代化遺産とはいえお金の問題は付いてまわります。カネボウ新町工場の場合には、この問題は今のところまったくの白紙状態です。

参考までに一般論として述べますと、カネボウ新町工場の場合には、ご承知のとおり歴史遺産や自然遺産ではなく近代化遺産です。従いまして、新たにカネボウ新町工場を購入した企業が世界遺産に指定された建物を現役の倉庫や生産施設としてそのまま活用しながら保存する場合には、県や市町村の経費負担はないようです。そうでなく史跡として残す場合には、富岡製糸のように、市町村が土地を公有地化にするための購入資金が必要になります。ただし、史跡指定を受けた後に公有地化するための土地購入の場合には、必要な資金の 80%を国が、10%前後を県が、残りの 10%程度を地元の市町村、具体的

には新町合併後の高崎市がそれぞれ負担することになります。それは、世界遺産というお金には換えられない文化的価値の高いものを持てるという喜びを考えますと、地元としては何とかならないような金額の問題ではないと思います。

群馬県には残念ながら国宝がありません。その代わりというわけではありませんが、未来の子供たちのためにも世界遺産を持てるようにみんなで協力しましょう。